

まえがき

向学心、という言葉の、最も簡単な定義は、学問に志すこと、であるだろう。そのために心を励まして努める態度を指す。意志が強くなければ前へ進めない。労苦にくじけない忍耐力が必要である。

もっとも一口に学問と言っても範囲は広い。学術上の書籍に集中して、学識を深めるのを主要な行程としよう。しかしまた別に技術の習練に没頭する道もある。さらには複雑な金融の組織を体得する方向もあろう。これらの分野はいずれも重要な活世界である。

それゆえ、向学心、の意味するところを、専ら本を読むことを中心とする狭義に解するのは妥当でなかろう。学ぶに足る広く多様な学問のすべて、そのどれかを選んで志を定める決意、それが実社会に有効な成果を生む向学心であろう。

しかし言うは易くして実地に進み出ることのむつかしいのが向学心である。なかには幼年にして生涯の進む道を決めている人もいた。しかしひとびとのほとんど多くは、何かの幸運なきっかけによってはじめて自覚し、自分は何をなすべきかについて考える。

昔からいちばん多いのは、父、母、祖父母による薫陶であろう。両親による刺激が奮起を促すのである。年の離れた兄が父母の代りをする場合もある。そしてかなり共通するのは、友人および先輩による激励であって、時には親よりも大きな感化を受けたという回想が聞かれる。また秀れた師によって、人生の進路を指示される場合も少なくない。

向学心は自己の確立として立派な決意である。ただし人の世の常として、自分の行き方を決める向学心が、知らぬ間におのずから湧いてくるとは限らない。大抵の場合は偶然のきっかけによって自覚が固まる。それゆえ自分に刺激を与えてくれる機会を逃してはならない。それはほとんど自分の周囲にいる人との接触による。親切に忠告をしてくれる友達は何よりの賜わりものである。それには何を措いても人に好かれることが肝要であろう。朋輩が自分は何をすべきかの暗示を与えてくれる例が多い。ほとんどの場合、向学心は、自分の環境から刺激されて固まってゆくと考えてもよいのではなかろうか。

本書は若くして心に向学心を定め、遂にそれを貫き通した多様な人物が、そのためにやむをえず苦しみながら、志を果たし、喜びへ到達した実例である。活躍した分野はあらゆる領域に広がっている。そこには実にさまざまな向学心の型が見られる。またそこには挫折しないために根性を据えた傑物が多い。自分の運を掴むことに機敏な人もいた。

いずれにせよ、向学心は一筋道ではなく、必ず多様な型があり、たまたまどの道を行こうとも、志を果たす機会が、どの方面にも待っていると見るべきではなかろうか。

西堀栄三郎

南極の生活で、何がいちばん苦しいかと聞かれたならば、わたしは、それは未知から来る不安だと答える。

われわれは、この南極がどんなところかを、きわめてわずかしか知らないのだ。これからさき、どんな寒さがかかるだろうか、どんな風がかかるだろうか。みんながどんな精神状態になるだろうか、何がおこるだろうか。そういう不安にたえず襲われているのである。それはたしかに、苦しいといえば苦しいものだ。しかし、その未知が、刻々の経験によって、すぐに既知に変ってくる。そしてそのとき、ひじょうな喜びをとまなうのである。その既知の喜びがあるからこそ、南極の生活は、わたしにとってこの上もなく楽しいものになっているのである。

すなわち経験によって未知を既知に変えるという積極的な前進志向が根幹をなしている。理論ではなく経験、という方針である。この発想はすでに若いときから芽生えていたのであろう。

そうなると、今まであれほど疲れ切ったのに、今度は全く疲れぬ。心の余裕も出てきた。人間が得意になると、どうしてこんなエネルギーが出てくるのかと不思議に思え

てならなかった。人に追従して行くのと、自主的な気持で行くのとでは、こんなに違うものなのか。肉体的な疲労は精神的な構えひとつでどうにでもなる。